

## 14 重度知的障害者の地域生活体験ホームでの取り組み

-地域での実体験が教えてくれたアセスメントの重要性-

秩父学園 地域支援課 地域移行推進室 滝澤剛敏 遠藤圭子 齋藤信哉

【問題の所在と目的】 本施設は障害児施設であるが、18歳以上の利用者が83%に達しており、障害児施設として原点回帰していくためには、地域生活移行が急務である。移行を進めるにあたって地域生活体験ホーム「ウィズ」を敷地内に設立し（H23.6）、地域移行を視野に入れた取り組みを行った。特にアセスメントについて、実際の地域生活体験の中で、利用者の主体的な行動に着目し、詳細な評価を得る事で、効果的な支援を考える基となったので紹介する。

【方法】 1.対象者プロフィール Aさん（20歳） 診断名：知的障害・自閉症 コミュニケーション：2語文程度の発語はある。言葉でのやり取りもできるが、文字やイラストによる確認がより伝わりやすい。 Bさん（23歳） 診断名：知的障害・自閉症 コミュニケーション：発語はあるが不明瞭。ジェスチャーやコミュニケーションブックにて伝達。日常的な指示は声かけでも可能であるが、イラストがより伝わりやすい。

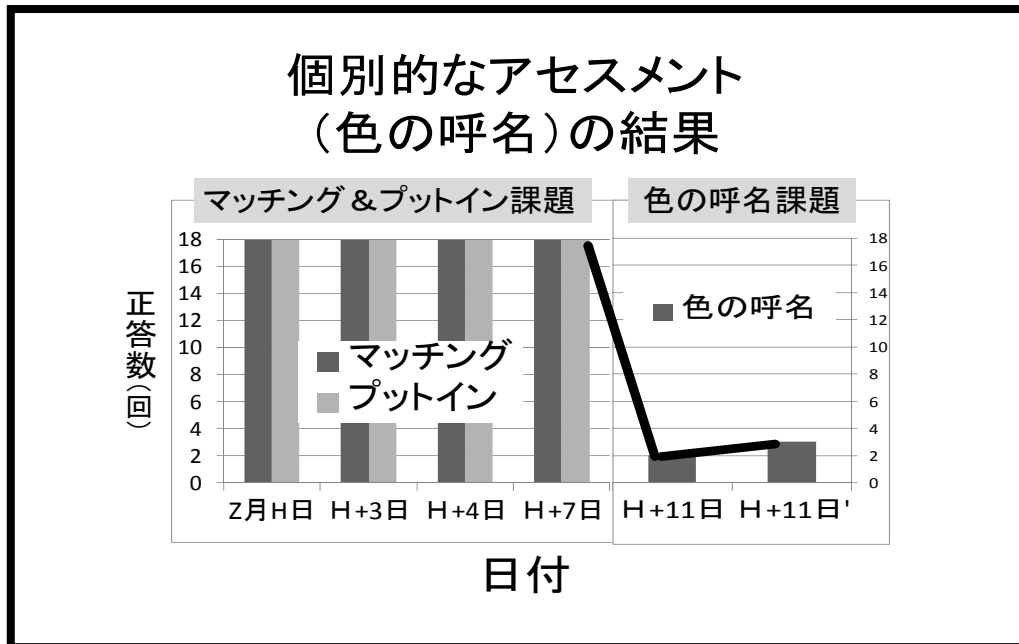
2.ウィズの支援方法決定の枠組み ①地域生活移行を目的としたアセスメント（シートによる評価）→基礎アセスメント ②アセスメントシートを基本とし、さらに実際の生活場面や課題等から得る詳細な個別アセスメント→実践アセスメント ③上記アセスメントに基づく優先度に応じた個別支援計画の作成と支援の実施

### 【結果】

	Aさん	Bさん
①基礎アセスメント		
目的	横断歩道を渡る	横断歩道を渡る
結果	信号を見ない。信号を指差し何色か尋ねると間違った色を答える。	信号の変化に気が付かない。1人で渡れる時と職員の声かけがないと渡れない時がある。
分析	色がわからないのか？	渡れる時と渡れない時があるのは何故か？
②実践アセスメント		
目的	【第Ⅰ期】色が理解できる	横断できる時の手掛かりを特定する
内容	色カードの分類	様々な横断歩道の横断
方法	信号の色で様々なイラストカードを用意。マッチングとプットイン課題を行う。(実施4日)	距離(5m以上・未満)、他横断者・横断時に流れる音の有無で、何を頼りにしているのかを見る。(実施10日)
結果	微妙な色の違いや、メインとなっている色の理解もあり、正解率100%。	距離はほぼ関係なし。他横断者+音ありの場合は横断でき、音なしの場合は渡れない。(図1)
目的	【第Ⅱ期】色の呼名がわかる	
内容	分類に使用したイラストカードを使用し、職員が何色かを尋ねる。(実施2日)	
結果	正解率13.5%と、色の分類に比べ、極端に正解率が低かった。(図2)	
Aさん		Bさん
視覚的に捉えた色と、言語として発する色の名前(音声)は一致していない。声に出せないが色の視覚的な理解はある。「信号機の色の意味」について、視覚的な支援を行うと共に、言語的理解の支援も併せて行う必要があると考える。		横断時には、他横断者の動きと信号から流れる音を頼りとしており、横断時には必ず手掛かりを視覚・聴覚から得ている事が分かる。手掛かりのあるルートを設定後、練習する事で、単独での安全な横断が可能になると考える。
③個別支援計画書の作成と支援の実施		
目標	音声装置から流れる音声と色のマッチングを行う	1人で横断歩道を渡る

【考察】 今回、地域移行を目指した取り組みとして社会性の部分のアセスメントの一部を挙げたが、アセスメントは1回で終了するものではなく、支援とアセスメントを繰り返し、支援が最終するまで継続して行う事で確かかつ効果的なアセスメント結果を導き出せると思われる。また、実際の地域に出るからこそ当事者の本当の姿を知る事ができ、詳細なアセスメントが当事者のQOL向上には不可欠であると考え。今後も、的確かつ効果的なアセスメントに基づき、地域移行支援を実践していきたい。

(図 1)



(図 2)

